佳作

傷ついてもいい、本気で挑む

富山県　立山町立雄山中学校二年　高浦　寛季

ピアノ伴奏のオーディションが始まった。ぼくの順番が近づく。脈拍のテンポが一気に加速した。深呼吸をしてピアノの前に座った。ふうっと息を吐き、指を鍵盤に置いた。弾き始めると、何だか楽しくなった。大成功。練習どおり、うまく演奏できた。

曲が決まってから、二週間、学校から帰ったらすぐにピアノに向かった。ご飯と風呂とトイレ以外、ずっと練習した。配られた審査の観点を何度も確認した。ピアノの先生から言われた「歌が主役。発表会のように主張する演奏ではなく、歌いやすく、歌が引き立つ伴奏」を心掛けて練習した。指定された部分が仕上がってからは、すぐにみんなと練習できるように、全部弾けるように準備した。

家族も応援してくれた。祖母は、オーディションの時間に仏壇にお参りしていてくれると言ってくれた。亡くなった祖父も見守ってくれている気がした。

オーディションの後、別のクラスの伴奏で参加していた双子の兄と振り返りをした。

「絶対、寛季だと思うよ。」

と兄が言ってくれた。対決した友達も上手だったけれど、審査の観点に合った演奏はぼくの方ができていたと思った。

翌朝、オーディションに参加したメンバーが呼ばれた。ぼくは、祈った。でも、発表されたのは、ぼくの名前じゃなかった。一瞬、何が起こったのか分からなくなった。先生が、

「とても迷って何度も聞き返して決めた。」

と言われた。そして、別の曲の伴奏を提案された。けれど、先生の声が遠くに聞こえて、床が浮いているようだった。その日、何の授業を受けたか覚えていない。友達の前でも笑顔がつくれなかった。クラスのみんなに、誰が伴奏者になったか聞かれて、友達の名前を答えるたび、本当に落ちたんだと自覚した。

帰宅した母に報告した瞬間、のどの奥から熱いものが込み上げてきて、気付いたら涙が止まらなかった。悲しくて、悔しくてたまらなかった。何日か食欲がなく、頭痛が続いた。

「自分のやりたいことに向かって、びっくりするぐらいの集中力でがんばった。そして、勝負の時に練習の成果を十分出し切れた。それってすごいことだよ。寛季を誇りに思う。」

母の言葉が背中を押してくれた。ぼくは、別の曲の伴奏に挑戦することにした。今は、新しい曲の練習をがんばっている。いつまでも落ちこんでいるぼくよりも、前向きに努力するぼくの方が、ぼくらしくていいと思う。

「感動」とは、うれしいことだと思っていたけれど、めちゃくちゃ悔しくて悲しいことも、心が大きく動けば「感動」なのだと知った。本気で取り組んだら、うまくいかなかった時にすごく落ち込むけれど、それでも、ぼくは、本気で挑戦したい。中途半端で傷つかない毎日よりも、傷ついてもいい、前向きに、感動いっぱいに生きていこうと思う。